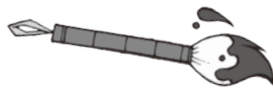


新・下野市風土記

華麗なる一族(4)



下野市教育委員会 文化財課

今回は、従四位上下毛野朝臣古麻呂が、慶雲2(705)年4月に兵部卿に新任されたことと、兵部省の役割について記しました。今回は、『続日本紀』に記されている2年後の記事から始めます。

文武天皇の崩御

慶雲4(707)年6月15日に文武天皇が崩御され、翌16日には殯宮(天皇など高貴な方々が亡くなったとき、死者を本葬するまで棺を仮安置し、別れを惜しむための建物)に関する儀式が行われました。

古墳時代から引き継がれていた儀式の執行の仕方や服装などは文武天皇の遺詔(天皇の遺言)のとおり簡素化されましたが、初七日から七七(四十九日)まで7日毎に四大寺(大官大寺、薬師寺、法興寺、川原寺)で仏教の儀式である齋会が行われました。

『続日本紀』の記事は、6月16日の後は10月3日となり、この間の記載がありません。

『続日本紀』から引用します。

「10月3日『二品の新田部親王・従四位上阿倍朝臣宿奈麻呂・従四位下佐伯宿禰大麻呂・従五位下紀朝臣男人を御竈司』に任じ、『従四位上下毛野朝臣古麻呂・正五位上の土師宿禰馬手・正五位下民忌寸比良夫・従五位上石上朝臣豊庭・従五位下藤原朝臣房前』を山陵司に任じ(後略)」と記されています。

御竈司とは、文武天皇の火葬に従事する役職です。一方、古麻呂が任命された山陵司とは、土木技術を駆使し、古墳の造営に従事する役職です。11月12日の記事では、「その日、飛鳥の岡で茶毘に付した」とあり、「11月20日遺骨を桧隈安古山陵に葬り申し上げた。」と記されています。茶毘に付した「飛鳥の岡」の地は、現在の奈良県高市郡明日香村岡と考えられます。

文武天皇の陵墓は何処

平安時代にまとめられた『延喜式』巻第二十一には、八省の一つである「治部省」とその下位組織である雅楽寮、玄蕃寮、諸陵寮について記されています。この中の諸陵寮に、『諸陵式』という山陵諸墓に関する記述があります。神代陵(ニキギノ尊などの祖先神に関する3陵墓)のほか、天皇陵及び三后陵三十七陵、皇后以下皇妃墓及び外戚墓などの四十七墓について記されています。

江戸期後半(1808年)には、現在の宇都宮市出身で、前方後円墳という名前の名付け親でもある蒲生君平が『山陵志』を記したとき、この『諸陵式』を参考に陵墓の比定を行っています。

文武天皇の遺骨が葬られたとされる「桧隈安古山陵」については、「大和国高市郡にあり」すなわち、現在の奈良県「明日香村大字栗原」にあると記されています。

元禄10(1697)年に行われた諸陵探索という調査以来、長いこと高松塚古墳が文武陵と考えられていました。現在は、明日香村平田に宮

内庁が管理する文武天皇陵がありますが、事実については様々な説があります。

文武天皇の陵墓がどこにあるのかも、どの程度の規模のものだったのかも定かではありませんが、古麻呂が山陵司に任じられた10月3日に工事に着手し、11月20日には遺骨を葬ったとあるので、50日足らずで完成したことになります。

この頃、畿内では既に前方後円墳は造られなくなっているので、円墳か八角墳だったと考えられます。高松塚古墳と同規模だとしたら、塚の土量は前方後円墳に比べて少なくなります。石室は立派なつくりだったことでしょう。

もしかすると、古麻呂が設計したのかもしれない。

お詫びと訂正

6月号の下毛野朝臣古麻呂の位の記載に誤りがありました。「従四位下」と記載しましたが、正しくは「従四位上」です。

お詫びし、訂正いたします。